

新発田藩歴史資料展

ごあいさつ

新発田市立歴史図書館には、新発田藩主溝口家のほか、旧藩士の家に伝わるもの、郷土史家が収集したものなど、新発田藩に関係する古文書類が豊富に保管されています。これは、市域の多くが江戸時代の新発田藩領に含まれていたこと、新発田藩が溝口家という大名とその家臣団によって営まれ、江戸時代のはじめから終わりまで継承されてきたことが強く影響しています。また、新発田の城下町は度重なる大火や大雨災害に遭いつつも、大きな戦乱による被害には巻き込まれませんでした。これらのことが新発田藩関係の古文書が失われずに残った要因といえます。また、明治維新による廃藩置県後・明治22(1889)年に城下町は新発田町として町制に移行しますが、東京に移住した藩主溝口家と、新発田に残った旧藩士・町屋の住民・菩提寺や神社との良好な関係が継続し、郷土意識と連帯感が維持されたために、町立図書館開館をきっかけに新発田藩の古文書類は集められ、現在もその充実が図られています。

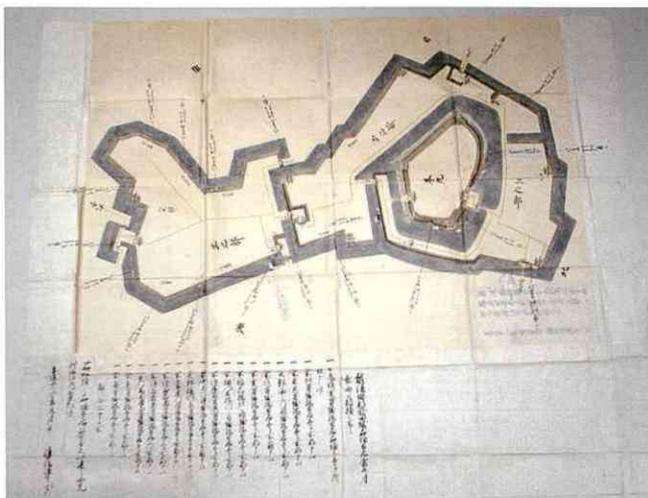
このたび、市立歴史図書館の開館に合わせこれらの一部を新発田藩歴史資料展として公開する運びとなりました。どうぞごゆっくりご覧いただき、悠久の歴史に思いを巡らせていただければ幸いです。最後に本展の開催にあたりご協力いただきました皆様に心からお礼申し上げます。

1. 多様な古文書群から歴史の情報を読み取る

ここに示した古文書・絵図は、新発田藩溝口家伝来品(郷土資料蔵書目録第1集記載分)・江戸上屋敷文書[ともに新発田市指定文化財]と、郷土史家の三扶誠五郎が収集した資料で、それぞれ別の持ち主から寄贈されました。いずれも享保10(1725)年に起こった大雨の災害とその復興の過程を示す記録です。

6代藩主直治なおはるによる治世の公式記録として残された大廟紀(資料1:写真未掲載)によれば、この年の5月10日から15日にかけて降り続いた大雨で、19日に城の石垣が崩れたと記述されています。その災害の詳細を示したのが資料2の絵図で、この絵図に貼られた紙の下に7月29日の日付、絵図の縁

に沿って貼り付けられた文書には9月付けの藩主溝口信濃守(直治)の署名が記されています。文面は被害の状況を記し、修復の許可を求めた内容となっています。これらは、幕府に提出した文書の控えとして保管されていたようです。資料3は、江戸上屋敷に残っていた文書で、老中から藩主に宛てて、城の修復を許可する内容が記述されています。このように複数の資料により、城の復旧工事をめぐる新発田藩と幕府とのやり取りがわかります。当時は、武家諸法度という法律で、大名は幕府の許可なく城の工事を行ってはならないとの定めがあり、これに基づく手続きが行われていました。



資料2「新発田城石垣・土居修復願附図」(三扶誠五郎文書)



資料3「御奉書(修補)」(江戸上屋敷文書)[市指定文化財]

2. 藩主ごとの年代記・藩士の系譜

歴代廟紀（新発田藩上屋敷文書）〔市指定文化財〕

新発田藩^{れきだいびょうき}歴代廟紀は、藩主ごとにまとめられた新発田藩の公式記録で、「御記録」とも呼ばれています。それぞれの藩主が治めた時代の出来事を、その藩主の戒名から一字を取り、うしろに廟紀と付けて一代記としています。

この編さん事業にあたったのは八代藩主直養家臣^{いしはら}の石原^{なおよす}寛信^{いしはら}で、安永元（1772）年に着手し、その後業務は家老の溝口半左衛門長裕に引き継がれ、17年の歳月をかけて寛政元（1789）年に初代から七代までの廟紀が完成しました。編さん事業は引き続き進められ、初代藩主秀勝（宝廟紀：天文17（1548）年～慶長15（1610）年）から12代藩主直正（第十二代紀：慶応3（1867）年～明治4（1871）年）までの323年分に及ぶ溝口氏と新発田藩の記録がまとめられています。

「歴代廟紀」は新発田藩溝口家伝来品（郷土資料目録第1集記載分）、溝口伊織家文書、江戸上屋敷文書の中に含まれています。目録第1集分は全藩主にあたる12代分があり（ただし、第12代は稿本）、版の大きさは19cm×27cmです。これに対し、江戸上屋敷分は大きさが22.8cm×32.3cmと、ひとまわり大きな上製本で、初代・二代・五～九代藩主の記録が残っています。八代藩主分は在任中に編纂されたためか、「御当代紀」と題箋が貼られています。江戸上屋敷文書分は江戸に居住していた藩主やその家族のために作られたものとみられます。

（展示期間：初代・二代・五代～七代7月7日～8月12日、
八代・九代8月14日～9月24日）



歴代廟紀（初代・二代・五～七代）

世臣譜・世臣姓系図〔市指定文化財〕

「世臣譜」は、新発田藩の主要な家臣の出自を家ごとにまとめた記録です。歴代廟紀の編さんにもかかわった新発田藩家老の溝口半左衛門長裕が寛政4（1792）年に執筆しまし

た。ここでそれぞれの藩士の家系、業績をまとめています。記載されている家は310家にもおよび、嘉永5年に渡辺黙容がまとめた「世臣姓系略」には系図がまとめられています。

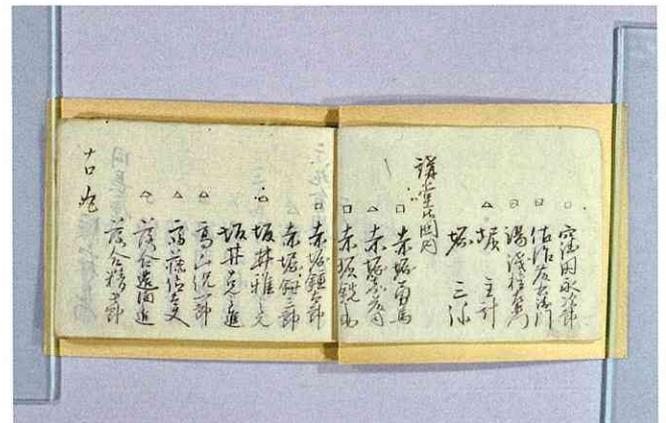
小説「露の玉垣」は溝口半左衛門長裕を主人公とし、歴代廟紀・世臣譜の編さんや、そこに登場する新発田藩士の姿が描かれています。



世臣譜（一～四 附録）

「世臣譜」の後に加わった家臣たち

世臣譜が刊行された35年後に作成された「続世臣譜」には、149家分が記載されています。ここに「世臣譜」の記載から漏れた家系、寛政年間以降に加わった家臣の家系や出自が記されています。世臣譜・続世臣譜と、明治6（1873）年に作成された新発田藩士名簿の「士族名寄帳」や、町ごとに居住者の氏名を記した「明治三年町内割名前附」（1870年）の記録を合わせると、城下町に在住した新発田藩士をほぼ網羅することができます。



明治三年町内割名前附（1870年）

3. レプリカで文化財を伝え、まもり、残す

彩色が施された絵図などは、光に当てるだけで退色するため、何世代も大切に文化財として伝えることと、広く公開して活用することを両立させるのは難しい課題です。公開が困難な絵図を、調査・研究や普及・活用に生かす場合、写真などの2次データを用いたり、精巧に作った複製品を作ってこれらの活動に充てることがあります。

一步一間歩詰惣絵図 (1974年複製)

天保年間に作成されたとみられる城下絵図で江戸後期の新発田城下町の様子をよく示しています。

新発田城中御間柄全図 (1977年複製)

本図は、新発田藩の普請方を勤めていた股野栄太郎が明治34 (1901) 年に作成した原図をもとに複製されました。本丸御屋敷の間取り、部屋の用途などが詳細に記されています。

本丸御殿端午の節供飾り図 (2018年複製)

江戸後期頃に作成された本丸御殿に飾られた端午の節供飾りとそれを鑑賞する人の姿が描かれています。平成30年の歴史図書館の開館に際し作成した複製品です。

前2者が刊行物として印刷されたのに対し、本図は複写機で作成したものです。

4. 描かれた新発田城

本丸御殿端午の節供飾り図 [市指定文化財]

本資料は記名や落款がないため制作者は不明ですが、作風から江戸後期頃に藩のお抱え絵師などの専門職によって描かれたと推察されます。描かれている光景は新発田城の表門を入ったところにある本丸御殿を南側からみた図で、玄関に置かれた式台の上には甲冑・太刀が飾られています。幕が張られた背後に纏や幟、伊達道具や毛槍、吹き流しが並ぶほか、鯉幟やショウキ様の旗がたなびいているため、端午の節供を祝った状況を表しています。また、この日は普段本丸に立ち入ることがない子ども連れ的女性も見学することができたようです。

新発田城鳥瞰図 1 [市指定文化財]

新発田城鳥瞰図は、掛け軸2、横長の巻物1の3点があります。本図は二の丸土橋門・本丸表門・辰巳櫓・本丸御殿を南から俯瞰で描き、土橋から二つの門を経由して本丸御殿へ向かう人を所々に描いて、藩士が登城する様子を見せています。

新発田城鳥瞰図 2 [市指定文化財]

本図は本丸三階櫓・裏門、二ノ丸屋敷地や講堂が描かれています。三階櫓を境に南側は正面から、北側は本丸部分が左から右、二ノ丸部分が右から左方向へと視点を移して描かれています。

御家中絵図 [新潟県指定文化財]

本図は正保2~3 (1645~1646) 年頃に作成されたと推定され、新発田の城下絵図としては最も古く、越後国絵図とともに正保4 (1647) 年に幕府に提出された「越後国新発田之城絵図」(現在は内閣文庫所蔵)の下絵と考えられます。

(展示期間:7月7日~8月12日)

5. 新発田藩学資料と教科書の印刷

新発田藩の藩学は八代藩主溝口直養なほやすの尽力により整備されました。直養は安永元 (1772) 年に二ノ丸に「道学堂」という藩校を設立し、そこで山崎闇斎学という崎門の朱子学を専門に学ばせていました。幕府は武家政治の基本理念として朱子学を広めていましたが、これが後に天皇中心の国造りを目指した「尊王論」へと発展し、明治維新へ至る思想にも大きな影響を与えました。

新発田藩は藩校を作るだけでなく、教科書の印刷にも取り組みました。道学堂には御版行方と呼ばれる出版に携わる職員が置かれ、サクラ材から印刷の原板にあたる版木を作って教科書の印刷を行っていました。印刷された教科書は学門に熱心な人には褒美として、希望者には紙代だけの実費で、貧困者には無償で配られました。現在、新発田藩主菩提寺の宝光寺と歴史図書館には1200枚弱の版木が残っています。また、藩校で使用した教科書3200点余りが歴史図書館に保管されており、これらは市の文化財に指定されています。

展示しているのは、朱子が学生の心得をまとめた「白鹿洞書院掲示」(「白鹿洞学規」は後の時代の呼び方)に、山崎闇斎が註を加えて慶安三 (1650) 年に出版した「白鹿洞学規集註」の新発田藩版と版木の一部で、天保15 (1844) 年に印刷されたことがわかります。



新発田藩版の版木 (白鹿洞学規集註) [市指定文化財]

6. 溝口伊織家の甲冑

越前の戦国大名朝倉氏の流れをくむ土橋吉六が初代新発田藩主溝口秀勝の娘を嫁に迎え、豊臣秀頼の家臣として子の弥太郎とともに大坂の陣に参加しました。大坂城落城の際、捕らえられた弥太郎を徳川方で参加していた二代藩主溝口宣勝^{のぶかつ}が引き取り、溝口姓を与えて家臣に迎えたのが溝口伊織家のはじまりです。溝口伊織家は新発田藩の家老職を務める家柄となり、幕末には異国船来航に備えた佐渡の警備、藩主の上洛や帰国に付き従うなど、藩政の中樞を担いました。

展示した甲冑は、溝口伊織家に伝来し、江戸後期頃のものともみられます。紺色地の布・糸に黒漆塗りの金具や鎖を巡らせ、袖や兜の前立てに金色の飾りを施した優品です。土橋吉六は朝倉家当主義景の子と伝えられ、兜の側面に配された「三つ盛り木瓜」は朝倉家と同じ家紋です。

(展示期間：7月7日～8月12日)

7. 陣立図屏風 [市指定文化財]

藩主溝口家に伝来していた六曲一双の屏風で、市に寄贈された際、表具直しされています。武者・御徒士・足軽・騎馬などを表現した木版を墨・朱を用い、各種・同版の印を連続して捺印して、陣形や隊列の配置を表現しています。また、墨書きで説明を加え、人物群の周囲には、胡粉とみられる金砂子で、雲・薄霧状の背景が表現されています。右双は、戦にあたっての陣の配置や、陣構えの注意点、左双は行軍のときの隊列や順序などを記しており、近世初期に作られた合戦図屏風・行幸図屏風など、ある一つの事象を取り上げたのではなく、兵法やしきたりに習い、作法や流派に基づいた具体的な陣の配置や隊列を表現したとみられます。江戸時代のいつ頃、誰が作ったかを示すような記述はありません。

(展示期間：8月14日～9月24日)

8. 丸田正通和算資料 [市指定文化財]

西洋の数学が輸入される前、日本で独自に発達した算術のことを和算といいます。江戸時代には商工業の発達や測量など、算術の必要性が高まり、いくつかの流派が生まれました。また、難しい問題を示し、これを解いたことを額に記した「算額」が盛んに神社や寺院に奉納されました。丸田正通^{まるたまきみち}(安永7年～天保4年[1779～1833])は、若い頃から和算を学び、同僚とともに諏訪神社へ算額を奉納するなどして頭角を現し、享和元(1801)年に江戸詰めとなってから最上流^{さいじょう}の算術を納め、帰国後は下勘定方や、測量・水利工事にも従事しました。

丸田が記した「算法教授録」は、水田の測量・立木の高さの算出法といった実践的な算術が記されています。また、文政10(1827)年に丸田の門人が諏訪神社へ奉納した算額の写しなどが残っています。

9. 丹羽伯弘資料 [市指定文化財]

丹羽伯弘^{にわはっこう}(寛政7年～弘化3年[1795～1846])は、若い頃から学問に優れ、18歳で郡方附人などの役職を与えられました。30歳で自宅の一室を使って「積善堂」(後に「学半楼」に改称)という私塾を開き、翌年、藩の命令で、3年間江戸で学問を学び、帰国後藩校の教授となることを目指していました。しかし、藩が定めた山崎闇斎^{はやしせう}学派を学ぶだけでなく、ほかの学派の朱子学を教える林檎宇^{はやしせう}にも弟子入りしたため、藩校教授の道は閉ざされ、職を解かれて私塾の経営に専念することになりました。伯弘とその子・孫に引き継がれた「積善堂」・「学半楼」で、大倉喜八郎をはじめとする幕末から明治時代に活躍する人材・教育者が学びました。伯弘は博学で、詩文や絵画を残したほか、著書の「随得随録」には天保年間の見聞が記され、地域史を扱った研究などが収録されています。

【参考文献】

- | | | |
|------------|------|---------------------------------------|
| 佐久間惇一 | 1977 | 「新発田御城中御間柄全図解説」『新発田御城中御間柄全図』新発田古地図刊行会 |
| 新発田古地図刊行会 | 1974 | 『一步一問歩詰総絵図』 |
| 新発田市史編纂委員会 | 1965 | 『新発田市史資料編第1巻新発田藩史料(1)藩主篇』 |
| 新発田市史編纂委員会 | 1965 | 『新発田市史資料編第2巻新発田藩史料(2)藩臣篇』 |
| 新発田市史編纂委員会 | 1981 | 『新発田市史』下巻 |
| 新発田市立図書館 | 1987 | 『新発田市文化財 丹羽伯弘遺作展』資料 |

～ 新発田市歴史図書館 開館記念特別展 ～

「新発田藩歴史資料展」配布資料

編集・発行：新発田市立歴史図書館
新潟県新発田市中央町4-11-27

刊 行：平成30年7月7日